石仏調査ニュース

ちがさきの石仏

第3号

発行　茅ヶ崎市文化資料館（市教育委員会）
編集協力　文化資料館と活動する会（民俗行事部会）

連絡先　茅ヶ崎市文化資料館
〒253-0055　茅ヶ崎市中海岸2-2-18
☎0467-85-1733

弁才天

資料館講座の開催

本年度の資料館講座が左記のように開催されます。

一回　二月二〇日（土）
午後一時三〇分～三時三〇分
『民俗学で学ぶ庶民の信仰と石仏』
「民間信仰のはなし」
神奈川県立歴史博物館学芸員　鈴木通大氏

二回　二月二一日（日）
午後一時三〇分～三時三〇分
「県内の年中行事にみる庶民の信仰」
神奈川県立歴史博物館学芸員　長田　平氏

三回　二月二七日（土）
午前一〇時～一二時
「庚申さまと地神さまの信仰」
町田市立博物館学芸員　畠山　豊氏

四回　二月二八日（日）
午後一時三〇分～三時三〇分
「茅ヶ崎の石仏調査から」
文化資料館と活動する会民俗行事部会

市内には約五〇〇基の石仏があります。中世の石造物も加えるとさらに膨大な数となります。

これらは、かって茅ヶ崎に住んだ庶民の信仰心から生まれたものです。

この講座では民間信仰のありさまを民俗学から学びます。

☆申し込み　二月一〇日（水）から、電話で文化資料館（八五ー一七三三）または社会教育課（八二ー一一一一　内線三三四三）

☆定員　先着三〇名

☆会場　茅ヶ崎市役所分庁舎
一回目　五階E会議室
二～四回目　五階AB会議室

寄稿・投稿・会員通信

石仏雑感

樋田豊宏

茅ヶ崎の石仏関係の資料をたいへん喜ばしく読ませて頂いております。

さて、先日、第六天神社の石仏を調査していましたら、ある人から、これは新発見だといわれました。それは、茅ヶ崎市史第三巻に載っていなかったものがあったからです。市史の調査の折には二基しかなかったのです。

これによると、向って拝殿の左側に六地蔵があったので、分布図に六地蔵の印は落ちています。そこに新発見の文字塔の庚申塔があったようです。それを私は書かなかったのです。

それは、寛政十年のものです。「寛政十年六月吉日」とあり、文字で「庚申塔」と刻まれ、台石が高さ一四・五センチ、塔身は四四センチほどでした。幅は台石が三一・一センチ、塔身は一七センチでした。

そしてその奥に元禄二乙巳年霜月吉祥日の文字塔と延宝五丁巳の文字塔がありました。共に三猿が彫ってあります。

ついでながら、石灯篭も庚申講中が奉納したものです。文化九年申十月吉日ですが、八

人の奉納者の中に鈴木惣兵衛がおります。鈴木惣兵衛の母親が、これより十五年前の寛政九年（一七九七）に、同じ十間坂金剛院の殿鐘の寄進者に名を連ねている。殿鐘は昭和十八年十二月八日、太平洋戦争の時の金属回収の折、供出されたが、金剛院の真柴和尚さんによって鐘銘が記録されていた。

『茅ヶ崎市文化財資料集』第六集によれば、

相州高座郡茅ヶ崎村　十間坂
法林山金剛院常什物
于時寛政九丁巳龍集季六月吉祥日
右奉納半鐘壱口
願主　六地蔵建立講中九人
并若者　和讃講中
茅ヶ崎山閑居　瑞応観進写
世話人　鈴木惣兵衛母
江戸西村和泉守作
一打鐘声
当願衆生　諸行無常
脱三界苦　是生滅法
即證菩提　生滅々已
寂滅為楽

とある。この文中に「六地蔵建立講中九人」とあって、また、新編相模國風土記稿によれば、「第六天社　金剛院持」となっている。

神仏混淆の時代であり、また金剛院には六地蔵がなければ、先の第六天社の拝殿の左にあり、それが最近、庚申塔とともに、拝殿の向って右側、元禄・延宝の庚申塔の右に六地蔵と共に移されたと思われる。

さらに、六地蔵は寛政九丁巳年前後に建立されたものではなかろうか。

弁才天

曽禰正夫

弁才天はインド、中国、日本に伝わる神話の中から、人間に福を与え、「弁天さま」という名で庶民に親しまれている女性神です。

弁才天の像容は、古くから八臂式と、二臂式の二つに分れます。

八臂式の弁才天は、天平時代、頭は白髪の老人で、身体は白蛇あるいは狐といわれ、大袖衣をまとい、武装護身性が強く、宇賀神（うかのかみ＝穀物の神）として、財宝・福徳神で表わされます。持物としては、奈良東大寺三月堂の（宇賀神）弁才天（天平時代作）に見られる弓・箭・刀・矛・斧・長杵（ちょうしょ）・鉄輪・羂索などです。

二臂式の弁才天は平安時代以後につくられるようになり、肉づきのよい豊満な身にあらわされ、白衣（宝衣）をまとい、白蓮華の上に座して、琵琶を抱えており、姿相は古代インドの聖なる河を神格化した神で、河の流れる音から転じて、知識・芸術・学問の守護神として、庶民にあがめられています。仏像としては、江ノ島（神奈川県）・竹生島（滋賀県）・宮島（広島県）にみられ、これを三弁天といい、金華山（宮城県）・天川（てんかわ：奈良県）を加えて、五弁天ともいいます。

外に、鎌倉の鶴岡八幡宮にもみられます。

なお、古来、弁才天をまつるところは、みな水辺におかれ、水の女神、弁才天の本質が伝えられています。後世、弁才天は吉祥天と混同され、七福神の神仙として信仰されており、明治維新以後は神社に合祀されるように改められたところが多いです。

市内の弁才天をまつる社は、明治三十一年から昭和二十三年まで、現在のＪＲ駅北口のロータリーのほぼ中央の位置にあった厳島神社（祭神は市杵島姫命（いちきしまひめのみこと）・田心姫命（たごりひめのみこと）・湍津姫命（たぎりひめのみこと））で、丸い池に囲まれており、「石神の弁天さま」といわれ、外からは樹木が一杯で、社殿は見られなかった思いがします。その後、現在まで、同神社は新栄町二丁目（ショッピング・センター裏）に移り、本殿の左側に二臂の弁天さまが池の中央に座しており、参拝者を見守っております。

参考文献

『仏像図鑑』上・下　図書刊行会一九九五年
『仏像彫刻の観賞基礎知識』光森正士・岡田健　至文堂　一九九五年

弁才天

厳島神社の手水石の謎

塩原冨男

新栄町二―一〇にある厳島神社（祭神厳島大神）は、昭和二十三年、現在地に遷座されるまでは、茅ケ崎駅北口広場にありました。それ以前にも転々としたといいます。創建は不詳ですが、そもそものはじめは、茅ケ崎駅の東方に、伊藤醤油屋の先祖、伊藤清左衛門が開いた新田の大池のあたりに弁才天を祭った弁天社だと伝えられ、それが現在の元町一四―一五、水島氏の所有地にあった石神弁天社だともいいます。（『しんまちを語る』）

境内には旧弁天社という「石神弁天社」、拝殿左の池の中に金銅製の裸弁天像、その手前に像高五〇センチほどの石像の弁天像がまつられており、新旧三つの手水石、石灯篭などがあります。

石像の弁天様の前にある手水石（高三〇センチ、幅七一センチ、奥行三三・五センチ）には、「嘉永六年（一八五三）丑正月吉日／奉納／厳島神社大前／願主木村市蔵」と彫られ、それなりの時代相を感じさせる形をしています。

弁天社がいつころ厳島神社と改称されたかは詳らかではありませんが、昭和五十八年十一月に新町地区自治会が発行の『しんまちを語る』によると、古老の座談会の中で、弁天社が駅前に移ったのは大正七年ころで、その時厳島神社と改名した云々と出ています。

とすれば、厳島神社と明記され、嘉永六年銘の手水石はどういう性格のものだろうか、という疑問が出てきます。『しんまちを語る』には、この手水石の説明はありません。弁天社とともに移動したものと考えますと旧地のころから厳島神社としてまつられ、弁天社と通称していたという見方ができます。

多くの弁天社が厳島神社と改称されるのは神仏分離令の出た明治以降のことであり、短見ながら明治以前市域における厳島神社の存在記録をしりません。天保十二年（一八四一）の成立とされる「新編相模国風土記稿」によると、当市域では、弁天社の名は柳島村にみえますが、厳島神社の名は出てきません。明治以前の厳島神社は疑問に思われます。

弁天社の当初の規模などは不詳ですが、いま境内にまつられる「石神弁天社」とされる石祠がそうだとするなら、おそらくは伊藤氏の開発新田の守護的存在ではなかったかと思われ、願主は当然に伊藤氏の名前であるのが自然です。「願主木村市蔵」とあるこの手水石はなんとなく不自然です。現在の石神弁天社の前には、紀年不詳の手水石が置かれています。

仮に嘉永六年に旧地の弁天社に奉納されたものとすれば、開拓の時期と重なり、貴重な存在になりますが、「厳島神社」の刻銘が気になります。後年、どこかにあったものを譲り受けたものなのか、そのふるい手水石に後で「厳島神社」銘を彫ったものなのか、嘉永六年の根拠は何か、木村市蔵はどこの人かなどといったことが疑問になります。

そこである古老にうかがうと、この手水石は、ある人が、いつのころかどこからか譲り受けてきて「厳島神社大前」と彫り込んだもので、今の神社とは関係ないものでしょう、との話でした。

これで、一応疑問や謎は解けましたが、それにしても、時代相応によくできているので困るのです。後年、経緯を知らない人々がどう理解されるか、まことに気掛りなことです。

石仏調査　今後の予定

☆現地調査
一月二二日（第三金曜日は祝祭日に当たるので第四金曜日に実施）
西久保の予定
集合場所　浜之郷龍前院　午前一〇時
二月一九日（金）　場所未定
三月一九日（金）　場所未定
☆まとめと勉強会
二月二五日　文化資料館　午後一時三〇分

調査済み石仏一覧

第二号までに記載以降の石仏を紙面が許す範囲で紹介します。

■第十一回　平成十年五月十五日

○新栄町三―十四―十五　厳島神社
裸弁財天像　無　丸彫立像
社号柱　昭和三三年（一九五八）平角柱
狛犬　昭和一三年（一九三八）
石神弁天社　無　石祠
石灯籠　昭和三二年（一九五七）
手洗石　無
手洗石　昭和二年（一九二七）
手洗石　嘉永六年（一八五三）長方台形
鳥居　昭和一二年（一九三七）
鳥居　昭和二年（一九二七）
○十間坂一―三―三九　円蔵寺
手洗石　無
弘法大師　無
弘法大師像　無
六地蔵　無
手洗石　無
地蔵菩薩　不明
地蔵菩薩　不明
○新栄町五―二〇　永野氏宅
道祖神？　無
○十間坂三―九―四七　神明宮
鳥居　昭和七年（一九三二）
庚申塔　明暦四年（一六五八）
庚申塔　文化九年（一八一二）　駒型
狛犬　昭和五六年（一九八一）
灯籠　昭和二七年（一九五二）
○十間坂三―九―五四　高橋氏宅前
地蔵　無
○十間坂三―一七―一八　第六天神社
狛犬　昭和八年（一九三三）　阿形
？　寛政一〇年（一七九八）　山状
鳥居　昭和一一年（一九三六）
六地蔵　不明
手洗石　大正五年（一九一六）
灯籠　無
庚申塔　元禄二年（一六八九）
道祖神　文政三年（一八二〇）　光背型双体
庚申塔　延宝五年（一六七七）
御神燈　享和元年（一八〇一）

■平成十年八月二十一日

○矢畑一四二　本社宮
道祖神　安永一〇年（一七八一）
手洗い石　昭和二年（一九二七）
鳥居　昭和二年（一九二七）
狛犬　無
道祖神　文化一一年（一八一四）　櫛型
恵比寿　無　丸彫
馬頭観音　無　起舟光背半肉彫
庚申塔　明暦二年（一六五六）　石祠型
道祖神　天保九年（一八三八）
宇賀神（蛇身塔）　不詳　丸彫
○矢畑一五〇　長善寺
釈迦如来　無　光背半肉彫
薬師如来　無　光背半肉彫
弘法大師座像　無　光背半肉彫
弘法大師座像　無　光背半肉彫
石灯籠　無
地蔵尊　昭和一七年（一九四二）　丸彫立像
地蔵　享保一六年（一七三一）　丸彫立像
地蔵菩薩　無　丸彫立像
馬頭観世音　昭和一七年

■平成一〇年九月一八日（土）

○浜之郷四六二　鶴嶺八幡社
灯籠？　無
道祖神　寛政七年（一七九五）
手洗い石　昭和五六年（一九八一）
手洗い石　享保二〇年（一七三五）
歌碑　無
墓塔　寛文九年（一六六九）
女護ヶ石　無　自然石
巳待塔　明和六年（一七六九）
石祠　宝暦一三年（一七六三）
鳥居　昭和三四年（一九五九）春日と八幡　混合型
石橋　大正一四年（一九二五）　太鼓型
狛犬　無
道祖神　大正三年（一九一四）駒型文字塔
馬頭観音　寛政七年（一七九五）光背半肉彫

この印刷物は、再生紙を使っています。（六〇〇）